

夢夢夢夢夢——ん

清水鱗造

灰皿町

アパートの斜向かいにある邸宅は建て増しを重ねて、庭の池のそばまで拡張された。ここに棲んでいる十匹の猫の遊び場が増えたことは、それぞれの猫にはとてもうれしいことだった。

猫の夢は、たいてい寝入りばなに毛皮に静電気が発生して、鼻がかゆく右足でこするときに始まる。

夜、人間たちが眠った後の廊下をみんなで競走しているとき、月が出ている空に木々のシルエットが切り絵のように浮かび、一瞬虎に変わった体がプシューツとしぼんでまた猫に戻る。

垂直に登ることができるのなら、天井を逆さで走ることができないのかと思っていた猫。夢の中ではちよつと試すと簡単にできてしまつて興奮して仲間に知らせようとしたとき、天井の水溜まりに足を取られ毛皮が濡れて、舐めて拭いた。天井の水溜まりはとても深かった。

十匹の猫がいるので十の夢が展開する毎夜。

猫の夢の一つを描いてみたが、残りの九匹の猫の夢。

○木々の枝は夜の小骨。

○多肉ちゃん^{たにく}がヒゲを触る（猫はオスもメスもヒゲがある）。

○猫は硬貨には全く関わらない。

○燕留^{ふりゆう}さんは真空管が好き。

○多肉ちゃんのイヤリングは月と星の形。

○オヤジさんは白、黒、青のランニングシャツを着る。

○トカゲのプジュルは遊び相手にはすばしっこすぎる。

○側溝のイトミミズはすぐ何かに気がついていっせいにゆらゆら踊る。

○ヒロンガ島のエリンチェムが茂る。

昼間は、猫は天井を逆さに走ることができない。そして、天井の一部が水溜まりになっていることはない。でも眠りのなかの、夢の文法では日常的であるのかもしれない。

猫は水溜まりに潜ってみた。すると、底のほうに明るく小さい穴が見えた。電車の座席の破れ目のように裂けたような中が明るい穴だ。猫は泳ぎ、穴に辿り着いて肉球と爪で開くと「高山を走る汽車の夢」の中だった。

猫の夢の出口は逆さの天井の水溜まりで、「高山を走る汽車の夢」の入口は座席の革